

大陸(中文)

私の青春

愛媛県 池田嘉高

私は大正十(一九二一)年五月六日生まれ、兵隊検査は昭和十六(一九四一)年、第一乙種合格です。高等小学校卒業とともに、隣の自転車店へ住み込み奉公、子供のころから憧れていた自転車技術を修業しました。年季が明け、自転車職人として働いている時、太平洋戦争が始まりました。

昭和十七年三月、「おめでとうございます」と言っ
て町役場の人が赤紙を持って来ました。「召集令状」と印刷された、ただ一枚の紙切れでした。

同年四月八日八時、部落長はじめ多くの人達の見送りを受け役場に着くと、同じく召集だった同級生の坂尾米一、小松二三九の両君は既に先着していました。

大勢の町民に「万歳！ 万歳！」と見送られ、バスに乗り我が家の前を通過した時、思わずまぶたに熱いものが込み上げてきました。

四月十日、徳島歩兵連隊通信中隊に入隊し、軍人勅諭に基づく三カ月間の厳しい教育訓練を終了。一期の検閲を受けるため岡山の日本原へ移動しました。

私は兵隊検査で第一乙種となった時から、「やがては必ず入隊の日が来る。それまでに一日も早く軍人勅諭を丸暗記しなくては」と、在郷軍人会の先輩からの指導もあり、毎日努力を重ね、入隊時には楽に大声ですらすらと朗詠できました。そのためか新兵教育の期

間中は模範兵として取り扱われ、いろいろと楽をさせてもらいました。

また、私は中隊の人事係曹長さんの当番兵を命ぜられ雑多な業務を果たしました。その中で最も良かったことは、曹長さんの軍刀の手入れの件です。当番の前任者はスピンドル油で拭くのみの手入れのせい、軍刀も鞘も黒ずんで鈍光を放つ状態でした。私は入隊前の自転車職人時代の経験から考えて、外出時には町の自転車屋で油、その他の必要品を求めて帰営し、それを使って軍刀をピカピカに光らせて曹長さんより褒めていただきました。それ以外に中隊の各班長さんからも頼まれて、皆に喜んでいただきました。

また、中隊の小隊長さんの一人が野戦帰りで片足が悪く常に自転車を使用していましたが、私はその自転車も整備点検し、軽やかでピカピカに仕上げ、小隊長の将校さんよりお礼を言われたようなこともあり、對抗ビンタや、きつい苦しい制裁とかは、予め適当な理由で隊から外れて楽をさせて、もらったりしました。

食事については麦飯が当初食べられず困りました。

一週間に一回の割合で飯の代わりにパンが出ました。

古兵さんはパンの真ん中のやわらかいところだけ食べ、外側の硬いところは残してあります。私はそのパンをポケットに入れて便所の中で食べたことを思い出します。また、食後に炊事へ食缶を返納に行った際に実際に見たことですが、コンクリートの平たい土間の上へ束にした野菜類に上から水をかけるのみで、それをそのまま細かく刻んで大きい鍋に入れて炊く。その時野菜にくっついていている青虫、なめくじ、かたつむり等も一緒に鍋の中へ。民間では味わえないダシとなります。

岡山県の日本原へ行った時の話です。演習場の付近にリンゴ園があり、兵隊はリンゴを盗んでは、夜毛布の中でそれをかじる。そのためか岡山県では兵隊は悪いことをするからと嫌われました。

七月、日本原で演習中、人事係曹長さんに呼び出され「池田！ お前は野戦に行きたくないか？」と聞

かれ「はい！ 行きたいです！」と答えました。今思えば馬鹿なことですが……。

野戦行きの決まった私達は、二泊三日の外泊を許可され、一〇〇日ぶりの我が家に帰り、親姉弟等と別れを惜しみました。申し遅れましたが、私の入隊当時の家族は両親、姉妹弟で、私が軍務のため入隊しても経済的にどうこうということもなく、後顧の憂いなく勇躍郷里を後にしたことでした。

七月二十日、中支派遣要員として中隊から十人が坂出港を出帆、上海へ向かいました。輸送船の中は七月下旬の真夏というのに、蚕棚を幾段にも仕組み、そこに詰め込みですから、横になり手足を伸ばすことは出来ず、蒸し風呂同様の高温多湿、眼鏡も曇る始末で、全員上半身裸となりました。中には全身あせもだらけの者もいました。救いは上甲板の舷側に危なげに仮設してある便所で、海風を浴びて暑さも忘れるほど。後がつかえているので早々に交替でしたが。

そのうち海の色が黄色く濁り、揚子江が近いと分か

る。やがて遼航。生まれてはじめて接する中国大陸、長江の景観。新兵達は前途の不安と期待に胸を躍らすばかり。武昌に上陸。鉄路南下。横江橋に駐屯する第四十師団第二三五連隊通信中隊に配属となりました。

ここでは初めの三カ月間は主としてモールス信号、五号無線機の操作の教育を受けました。この三カ月の間、初年兵三人で消灯後、チャン酎を飲んで深酔いしました。折悪しくその夜「初年兵集合」がかかり、三人は酩酊です。平素より要注意の〇〇新兵が首謀者と分かり、私もビンタの二、三発やられました。〇〇君は徹底的にやられ、数日間は班内で臥床の状態でした。半殺しにされました。

そのうちに、湖北殲滅作戦に参加。五号無線機を背負い最前線へ進出、交信連絡を取りつつ意気旺盛に中支の野戦を駆け巡りました。この作戦では敵将の王頭哉を生け捕りにした騎兵の佐伯部隊の勇名が轟きました。

しかし、それも束の間。七月の雨期、次の作戦に参

加。毎日毎日の雨で、足元は腰まで浸かるどぶ田で、夜を徹して進めどはかどらず、ついには馬の尻尾を掴んで進み、馬が止まると馬の尻に突き当たる始末でした。おまけに虱だらけ。銃後の夫人達の心尽くしの千人針まで虱いっぱい。加えてマラリア蚊の大群に悩まされながら、なおも飲まず食わずの進撃が続きました。

一週間に一度ぐらいの割合で野菜の収集していた趙李橋駐留の時のこと。中野一等兵を見張りに立てて収集していると、突然一発の銃声。振り向くと中野が倒れている。駆け寄って見ると、左あごから左耳後に血が吹き出している。「しまった！」と思い前方を見ると、一人の民兵が走り逃げており、急ぎ狙い撃ちをしましたが逃がしてしまいました。薬も何もなく、タバコとヨモギをつぶして傷口をふさぎ、じゅばんで頭を包み、巻脚絆でグルグル巻きにして班へ帰りました。班長は「池田以下五人で岳州の病院へ行け」と言われ、その足でトラックに飛び乗り夜を徹して病院へ行きました。帰る道々、これは重営倉行きかと覚悟して

いました。中隊長さんよりいろいろと注意を受けたのみで済み、ほっとしたものでした。

武昌より岳州へ進み粵漢線補強の任務につき、分隊長として通信兵十人を引き連れ、趙李橋付近に進出しました。架線の電信線の補強工事を進めるため、駄馬に車両を引かせ、通信資材を満載して駅から分哨へ、分哨から各駅へと運搬する。やっと補強整備を終えた直後に八路军の襲撃を受け、電柱が切り倒されて、十回線電線が切断されるということが毎日毎夜の繰り返しでした。その都度分哨の兵士達と共に敵を追撃し、応急修理で通信を開通するなど、夜を日についての苦戦激闘でした。

敵の迫撃砲の破片が左足の向こう脛に当たり負傷しました。衛生兵が破片を掘り出してヨーチンで消毒し、一カ月程度で治りました。けれども復員後また腫れ上がり、切開手術をしました。今に残る傷痕です。また、敵の銃弾が頸を擦過して失神したこともありました。

大別山作戦終了後、抜擢されて九江に進み、鉄道連隊へ派遣され、九江―南昌間の鉄道撤収作戦に参加、通信兵として五号無線機を背負って徳安から修水へと進み、最前線の鉄道を撤収する部隊に追隨して、各隊との交信連絡に当たりました。撤収したレールを船に積み、揚子江を溯上、武昌より岳州へ進み、粵漢線補強の任務につきました。

その頃、召集兵が来たと聞き行ってみました。二等兵ばかりでしたが、私が「愛媛県から来た兵隊はおらんか?」と聞きました。すると「はい、自分は愛媛です」と声をする。近寄ってみると何と、故郷で近所の山本守君です。相手もたまげて「あつ、嘉ちゃん」と思わず叫びました。ところが何せ階級の厳しい軍隊のことですから、側にいた上等兵が「貴様、何をぬかすか」と山本君のビンタを取ったので、「国での友達だ、ゆるしてやれ」と言ったこともありました。こんな中国大陸の前線で故郷の友人に会うとは、神様のお導きと心の中で手を合わせました。三日後、饅頭を持って会いに行きましたが、既に山本君はおらず残念でし

た。

奮戦空しく終戦を迎え、中支の各部隊將兵ひとしく虚脱状態に陥りました。しかし「厳正な軍紀のもと一日も早く帰国して祖国の復興に努力すべし」との訓示により、黙々としてドブさらい、枕木担ぎ等、重労働に六十キロの体重も四十五キロになり、飢餓と栄養失調に苦しみました。死んで中国の土になってしまおうかと観念した時もありました。

昭和二十一年六月末日、ようやく佐世保に上陸、復員しました。なつかしい我が家にとどり着き、「只今帰りました」と叫ぶと家族総出で迎えてくれて、涙、涙で感無量とはあの時の表現だったと思います。何しろ体重は六十キロから四十五キロに激減、頭髪はシュロほらきのようになり、入隊時の容姿とはまったく別人に変わり果てていました。

復員後も時々マラリアに悩まされたり、先にも述べた足の迫撃砲の破片に苦しみなながらも、家族の支えに

勵まされ、自転車を開業しました。お陰様で店も追々と繁盛しておりました。

昭和二十二年十一月二十日結婚し、一男二女に恵まれ、さらに孫七人、ひ孫二人と幸福の輪を広げ幸せいっぱい、老妻と朝夕感謝の毎日です。

それにつけても、中国大陸の戦野に若くして護国の魂と散華した戦友を思えば、遙か西の方に手を合わせて冥福を祈ること切なるものがあります。昭和六十一年、息子に店を任せ、私は手伝っています。折々に好きな釣りに出かけて、趣味と実益を楽しむ日々です。

強健体となつて

保護員から高射砲隊へ

福島県 山内 勝 衛

私の生まれた町は、あの有名な歌手の春日八郎の生地でもあります。私の生家は荒物雑貨販売業で、両親、祖母、私、弟三人、妹一人の計八人家族です。長

男は満州へ行っていました。私は手伝いとして家業に励んでいました。

昭和十六（一九四一）年五月に徴用令がきて、横須賀航空技術廠で軍艦から飛行機を射出する時に使う「カタパルト」を製作していました。昭和十八年七月、兵隊検査を徴用先の横須賀で受け、第一乙種合格となり現役兵として入隊を待っていました。

「昭和十八年十二月十日、門司市に集合すべし」との通知が来て、家族親戚に別れを告げ、門司に向け出発しました。再び生きて帰れぬと覚悟を決めての門司でした。

門司には現地から引率役の下士官が来ていました。集まった若者は同じ行き先ばかりでなく混成でした。

私の入隊先は支那の高射砲第十五連隊第五中隊（甲一四〇九部隊梁田隊）、場所は北京とのこと。博多で輸送船に乗り釜山に上陸、はじめての大陸に感慨深く、列車輸送で満州経由で北京の南苑の第五中隊に到着しました。建物は中国風の建物でした。

私は身体虚弱のため、そのあと直ちに保護兵となり